

資本主義の異質性

二十世紀の標準でもあった社会主義が世界的に解体し、中国をはじめアジアに残る社会主義国も市場経済へ移行しつつある現在、資本主義のグローバル化が実現したと見ることもできるが、その同じ資本主義でも、国により、地域により随分違つてはいないか、という議論がいまアメリカで高まっている。

社会主義というシステムその共通性が崩れた一方で、資本主義というシステムの普遍性を語るには、世界は違い過ぎるという認識が、こうした議論の土台にあることは否めない。

アメリカに比してあまりにも強すぎる経済力をもつ日本の社会システムや企業行動は不正であり、異質であって、同じ資本主義として同じ土俵で論ずるわけにはゆかないという意見は、私の古くからの友人で現在は同僚でもあるチャルマース・ジョンソン氏(カリフォルニア大名教授)に代表されている。最近アメリカで一般封切りされて大評判の映画「Rising

g Sun(昇日)―(曰る世界諸地域の宗教)と題する三日目の総会(座長はマイケル・クライトン原作のテクノ・スリラー映画)アン・ウオウエ女史)が「日本叩き」を意図したものであった。おいてであった。会場の経済学大学はドナ

昇進することこの映画が観客を寄せ集めることになるかもしれない。こうした状況下で、それぞれに異なった歴史的背景をもつ文化や国民性が改めて注目されることは当然だとしても、東アジアの経済発展に資本主義の儒教型発展のパターンを見いださずとする議論も依然として行われていた。

宗教学者でもなく、社会学者でもない私が、さる七月下旬に五日間にわたってハンガリーの首都ブダペストで開かれた第十二回国際宗教社会学会大会に招かれ、一東アジアの経済発展と儒教的倫理」と題して報告することになった背景にも、右のような国際的な知識の潮流が存在していたといえよう。

隔年で開かれるという国際宗教社会学会大会の今年共通テーマは、「宗教・文化・アイデンティティ」であり、私が基調報告の一つを行ったのは、「台頭す

儒教的倫理と経済発展

ブダペストでの国際宗教社会学会から

直接の関係見いだせぬが  
「見えざる道德律」が作用



おね 中嶋 じま 中

アメリカをはじめとする主に欧米からの参加者が大教室の総会場を埋めつくし、日本からも宗教学の島蘭進(東大)、阿部美哉(国学付文化面「経済発展の要因と文化」)。

最近では東アジアの経済発展を儒教文化に短絡する儒教還元主義的な議論はさすがに影をひそめはしたが、一方では中国大陸をはじめとして儒教再評価の潮流も存在する。それだけにこの問題は、一定の学問的手続きを経て、慎重に論じられねばならないといえよう。

東アジア研究盛んに  
東アジアの経済発展の原

私はブダペストでの報告の直前パリで開かれた現港、台湾、韓国、シンガポールのアジアNIEs(新興工業国・地域群)が経済的に台頭した一九八〇年代になって、欧米先進諸国で盛んになった。わが国においても、私自身が研究代表者をつとめた文部省科学研究費重点領域研究「東アジア比較研究」(一九八七

私はポーランドに立ち寄った。そこでは社会主義の残滓を随所に感じたが、ワルシャワ大学前に建つコペルニクス像の周辺は荒れ果ててごみだらけだというのが、シヨパンの心臓が柱に埋まっているという聖十字架教会には、カトリック信者が大勢集まってひたすら祈っている様子がこぞ印象的であった。

ウ川に面する由緒ある建物を占め、同大学はハンガリー最高の学府とのことであったが、私の報告当日はかなりの悪天候だったにもかかわらず、早朝からフランス、イタリア、イギリス、

同大会での私の報告要旨は、東アジアの経済発展と儒教的倫理とのあいだに直接の関係を求めることはできないが、ひとたび近代化の中国」など。現在、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授として

東京外国語大学教授・国際関係論、現代中国学一九九三年長野県生まれ。著書に「国際関係論」「三つの中国」など。現在、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授として



文化

文化

文化

文化

文化